

「父と子」の映畫

奥 平 英 雄

母性愛といふ言葉は、人類の女性がこの地上に生み出された創生紀に於いて、その時から既に彼女達の心臓の上に烙印された最も大きな魂の義務であつて、今日ではこの言葉はあまりにも普遍的になり、あまりにも常識に化され、

我々が水や太陽を呼ぶのと同じやうに殆んど全く何等の驚異も興感も起さなくなつたやうな氣がします。謂はゞ、それほゞにも母の愛の大きくして醇澤であることを教へられるのでありますが、之に對して父性愛といふものはそれほゞにも強調されて來なかつたやうです。之は云ふまでもなく父親の存在なり立場なりが、全然母親のそれと職能を異にし、父親は母親ほゞ常住坐臥子供の側に暮し、之と共に在ることが許されなかつたために、自然にさういふ結果になつたとは思ひますが、然し之だけの理由で父性愛といふ

ものをさう簡単に片付けることは許されない、私は思つて居ります。一體子供にまつて親の愛といふものは、母の愛、父の愛と區別して考へられるべきものではなく、本來はこの二人のものゝ渾然たる結合體である筈です。子供にまつては父、母のその何れが缺けましても重大な齟齬を來すので、親の愛といふものは兩親が二人そろつて子供に放射しなければならぬ魂の太陽でありまして、その一方だけではさうしても子供の心に行きわたらない何ものかがあるやうな氣がします。

が、そうした理窟は暫く措きまして、さも角も我々の歴史に於いて、母性愛に較べるに父性愛といふものはあまりにも片隅に置かれて來たやうな氣が致します。東西の文學や演劇、美術の上に於いても殆んど母性愛に獨占された形

であります。前にも述べましたやうに、父親の愛情をいふものは母親のそれよりはその現はれ方や性質に於いて幾分異なるところはあります。その方向に於いては全然同一である筈なのです。もつこ之が藝術の上にも表現され、検討されて來ても良かったらうに私は考へるのです。

ところで映畫の上に於いても同様で、母性愛を描いた作品は之迄相當にありますし、又その中名高い傑作にも乏しくありません。ところが父性愛を描いた作品を云ひますと、之は甚だ乏しかったやうに思ひます。謂はゞ子供といふものは、母親によつて慈しまれ育まれて行くものだから、父親がその愛を發揮する餘地は極度に縮められ見逃されて來てゐるやうに思へます。ですから父親が文學なり、映畫なりに登場して來る場合には、單なる一個の平凡な父親としてか、又は子と相争ふ立場に置かれた頑迷な父親として、又つて、もつこ父親には父親としての獨特な心境のあるものであることを親切に描いたものは非常に稀なやうであります。假令父親としての愛に終始したものでなくても、一個

の人間としての弱點や悩みを懐き、人の子の親としての種類の心境を往來するものであるならば、それだけで立派なものが生れて來るやうに考へますけれど、そうしたものが矢張稀なやうであります。

扱つかうした數の少いものゝ中から、特に私の印象に残つて居ります「父と子」の繋りを描いた作品を二三拾つて何か書いて見ようと思ひます。

アベル・ガンスを申しますと、フランス映畫界の元老であるばかりでなく、世界の映畫史上特筆されなければならぬ功績のある監督であります。この人の作品に『鐵路の白薔薇』といふ傑作があります。之は今から十二年ほど前(一九二三年)に出來たものであります。『映畫の抒情詩』と迄呼ばれた映畫藝術の最高峯を示すものであります。之は映畫藝術としての技巧に於いても、表現に於いても、リズム、光なきといふ點に於いても完璧に近いこと勿論であります。それがかりでなくその中に描かれたテーマに於いても、充分に文學的な要素を具えてゐたものであります。

鐵道の機關士にシジフといふ一人の若い男が居りましたが、彼は不幸にも男やもめでおまげに一人の幼児(男の子)の父親でありました。このシジフが或る日のこゝ自分の運轉する列車を何かの間違ひで他の列車と衝突させて了ひました。そして阿鼻叫喚の中から、この衝突のために死んだ母親の手に抱かれて不思議にも生き残つた一人の女の幼児を拾つて連れ歸ります。月日が経ちまして自分の子も拾つた子も共々男の手一つで大きくなりますが、子供達はその経緯を知らないで本當の親子、兄妹だと思つてゐます。女の子は次第に成長して年頃になります、之は又花も恥らふやうな美しい娘になつて來ました。そうするに、之迄父親のやうな氣持で手鹽にかけて育て、來たシジフの心に、何時の間にか年甲斐もなくこの娘に對する戀心が萌え出して來たのです。抑えようとしても抑えきれない情愛が、何時の間にか自分の容貌、身なりにまで心を碎いてこの娘の心にこり入りたいといふ欲望まで湧き立たせます。そうしたシジフの心を知る由もない娘は、自分の息子との之はまたひびく睦じい間柄を見てゐます。嫉妬と懊惱に苛まれ

ずには居られないのです。そうして到底自分の手に歸するものでないを諦めたとき、せめて息子の身邊からでも遠いところに娘を離さうと決心して娘を見染めたある男の許に嫁がせて了ひます。ところが息子はさうも妹が本當の妹ではないといふ直觀をいひますか、さうもさういふ氣がしてならない。娘も兄さんといふやうな淡々たる氣持ではなく、世の中の一歩なつかしい男性としてのみ感じられる。この自然の相呼ぶ感情をさかれて二人は別れるのですが、この女の氣持を知つた女の夫が非常な嫉妬に驅られまして、息子に雪に蔽はれた山の上で決闘をします。息子は誤つて谷底に落ち夫は撃たれて仆れます。その頃シジフは機關車の修繕中、強烈な蒸氣が洩れて兩眼をやられ失明して了ひました。この失明したシジフが今は亡き息子の十字架を建て、るために、犬に手を曳かれて山の上の息子の墜ち場所に登るのです。見えない手でその十字架を建て、見えない眼にはかなかつた父と息子の因縁や宿命を偲んで、今は泣くにも泣かれない孤獨の中に包まれ乍ら、デツと手を組んで祈りを捧げるところがあります。この地上に影を落した十字

架ミ父親の祈禱の姿ミが非常に繪畫的な迫力を以て、いつまでも私の眼から去らないで居ます。之は父ミ子ミの愛慾の惱みを描いたものではありますが、シジフミいふ一個の平凡な人間の、人間ミして、又父親ミしての一生が非常に細かく描かれた作品でありましたので、今日でも古典中の古典ミして第一に指を屈せられて居る寫眞であります。

次に獨逸の有名な俳優エミール、ヤニングスがアメリカに渡つて作りました『肉體の道』ミいふ寫眞がありますが、之は前記の作品ほゞ傑作ではありませんが、それが、

も當時騒がれたものであります。ある眞面目な家庭の父親が會社の用で旅行に出ましたが、旅先でつまらぬ女の誘惑に遭ひ公金を費消し、つひに行衛をくらませるために自殺したやうに装ひました。それから幾十年かの後、老ひさらばへて故郷に歸つて來ますが子供達はそれぞれ成長しまして、殊に長男は提琴家ミして漸く樂壇に認められるやうになつてゐます。今日しもこの息子の演奏會が開かれるといふ日に、乏しい財布から一枚の切符を買ひまして、人々の歡呼の中にある子供の姿を見上げ乍ら終始泣き濡れてゐる

父親の姿は、ヤニングスの熱烈な演技にもよりますが、非常に私達の胸を打つたものであります。而もかうした長男や妻や他の子供達が、自分をミつくに死んだものミ信じて、或る日墓參に行くのを見かけますけれど、今は父親ミして到底名乗るこも適はないで、泣き／＼雪の中に消えて行くのですが、この最後の、子は親ミいふこを知らず、然し人なつかしくやさしくこの老人を勢はる場面、父は父親ミ名乗れないで唯々子の顔をうち守る場面は、やはり我々の涙を誘つたものであります。

この二つの寫眞は、何れも父親そのものゝ性格的な、又は運命的な弱さから來る悲劇を描いてゐるものであります。要するに父親も子の側を離れては生きて行けるものではない、子は母ミ共に父親の力によつて成育して行くものではあるが、父親もまた子の愛なくして、子の存在なくしては、完全にその生を全うし得るものでないこを物語つて居ります。

ミころで、今度は轉じて日本の映畫をのぞいて見ます。小津安二郎ミ云ひますミ、ミなたも御存じのこミ、思ひま

すが、この監督は現在の日本映畫界では最も藝術的良心を持つてゐる優秀な監督であります。この人の作品に『生れては見たけれど』(昭和七年製作)といふ寫眞があります。之は子供を中心として子供の眼に映じた大人の世界、父親の生活語つたものでありまして、前の米佛の寫眞とは異つてこゝに人間の社會苦さいつたものを描いてゐるのです。そしてこの點が特にこの映畫を歴史的にも藝術的にも賞揚させた原因なのであります。小學校に通つてゐる良一と啓三といふ二人の兄弟が出て來ます。この二人の父親は所謂サラリーマンでありますが、この父親は自己の昇進と自己の家庭の安全を計るために、日夜會社の専務の御機嫌をこころみに窮々たる有様です。例へば會社の同僚達には子供の健康のために郊外に引越すのだと稱して、特に専務の邸の近所に轉宅する。そして何彼につけて専務の邸にも出入りし、會社でも専務の命とあれは假令社員達の前でも滑稽な藝當位は演じて見せる。御蔭で次第に昇進しまして今では課長の椅子まで與へられてゐます。然し家庭にあつては嚴格な父親としての態度で子供にも臨み、そうしたこ

を知らない子供達は自分のお父さんはなんとも偉い人だと思つてゐます。この二人の子供は今、やんちゃな盛りで、たゞはありますし、又正直な子供のことであり、ひ近所の専務の子供が金持の子であらうが、父親の主人の子供であらうが、てんでそんなことには御構ひなしです。そればかりか、専務の子供が金持を笠に着て近所の子供に君臨してゐるのが目障りで仕方がない。ですから何彼につけて對立してゐます。殊に良一の方は、自分の方が専務の子供(太郎)よりも學力でも腕力でも優れてゐることを自認し、この優れた力を何よりもの誇りとしてゐるのです。ところが或る晩のこゝ、専務の邸で専務の道樂のパーティーの映寫會が開かれまして、良一と啓三の父親も他の社員達と一緒に招かれ、子供達は子供達で一緒に之を見物させて貰ふことになりました。この映寫會は、初めのうちは隅田川だとか動物園、銀座などの實寫が出て來ますが、聽て會社の風景が映されますと、良一達の父親が多くの社員の前でベンギン鳥のやうな格好をして、大いに専務を初め社員の爆笑を購つてゐる、珍藝を演じてゐる場面が映ります。

日頃子供達の前では厳格な態度を持し、厳格な教訓を垂れてゐる父親は、之は全く似ても似つかない姿なのです。

今までかつて一度も見たこともない、思ひもよらぬ、父親の野放圖もない破廉恥な姿なのです。この恥しさ、この口惜しさ、この惨めさ、この感情が二人の子供達の胸に込みあげて來まして、二人はこの邸からさび出して歸ります。

昨日迄描かれてゐたお父さんの尊嚴も親しみも、もう子供達から消えて了つたのです。そしてそこにはたゞ貧弱な一人の男としての父親があるだけです。で、子供はその後に歸つて來た父親の前に突つ立つて云ふのです。

良一「お父ちゃん」

父親「ウム」

良一「お父ちゃんは僕たちに偉くなれ、偉くなれと言つてる

癖にちつとも偉くないんだね」、「さういふ譯で太郎ちゃんのお父ちゃんにあんなに頭を下げるの？」

父親(當惑さうに苦笑しながら)「さう簡單にはゆかんよ、お

父ちゃんは岩崎さんの會社の社員だからね」、「つまり太郎

ちゃんのお父さんから月給を貰つてゐるんだよ」

良一「月給なんか貰はなきやいゝぢやないか」

啓二(そばから)「そうだ。そんなものこつちからやればいゝぢやないか」

父親(たしなめるやうに)「お父さんが月給を貰はなかつたら、お前たちは學校へ行く事もご飯を食べることも出来ないぞ(威壓的に)「それでもいゝのか」

良一(二度自分の部屋に歸り、出て來て)「さうして太郎ちゃんのお父ちゃんだけ重役で、うちのお父ちゃんは重役でないの？」

父親「太郎ちゃんこそはお金持だからだよ」

良一「お金があるから偉いの？」

父親(撫然として)「世の中には——お金がなくて偉い人もある」

良一(切りこむやうに)「お父ちゃんはさつちだいい」

父親(むつきして)「さうしてお前たちはそんな事をうるさく聞くんだ」

啓二(そばから)「矢張り偉くないんだよ」

良一(父親の父としての尊嚴さを保持しようとする、その威

壓的な視線に屈しまいさして、「そんな顔こはくないや」

良一「こみ上げて来る口惜しさから」「お父ちゃんの弱虫！」

「お父ちゃんの意氣地なし！」と同時に良一は、自室の品物を手當り次第投げ散らす。啓二もついて投げ散らす。

父親立ち上つて良一を引つ摺み、自分でも解決の出来ない、悲愴な憤りを以て、己れの面を打つ如くに子の體をひつぱたく。子供等は泣き出す。

母親(その中に割つて入つて)「お前たちはいゝ子だからおだまりね」

良一(泣きじやくり乍ら)「僕は太郎ちゃんよりも強いし學校だつて上なんだ」「大人になつて太郎ちゃんの家來になる位なら學校なんかやめだい」

父親「何を云ふか！判らない奴だ」(摺みかゝらうとするのを母こめる)。

子供達の部屋——

啓二「兄ちゃん、ぶたれたね」

良一「いくらぶつたつて、偉くないものは偉くないんだ」

啓二「寝ようよ」

子供達蒲團の上に仰向いて横はる。

夫婦の部屋——

父親(憔悴したやうな顔をして)「さうも困つた奴だ」(酒の瓶をこり上げながら)

「酒でも飲まなけりやあ！」

母親(考へながら)「子供にはもう少しやさしく話が出来ないものでせうか？」

父親「子供達の氣持は俺にだつてわかるよ」

「しかしあの場合、あれよりほかに方法があるか」

母親「それぢや、あれで子供が納得したさでも仰言るんですか」

父親(きつく、而も佻しく)「この問題はこれからの子供には死ぬまで一生つきまわるんだ」「俺だつて何も好き好んで専務の御機嫌はこりたくはないんだ。馬鹿々々しい」でもそのお蔭で、生活だつて前よりすつと樂になつて來てゐるんだ」

母親「それは私にだつてわかつてますけれど」母親は起つて子供の部室に行く。父親もついて入る。そして、もう無

心な寢息をたて、スヤ／＼と寢入つてゐる子供達の寢顔をうち守る。良一の眠つた眼からはまだ干かぬ涙がにじんでゐる。母親それをそつと拭いてやる。靜かな／＼子供達の寢息。そのいぢらしい、可憐な子供等の顔を何時迄もうち守る寂しさうな親達の顔。

父親「こいつも一生忙しく爪を噛んで暮すのか」「俺のやうなやくざな會社員にならないでくれ」

以上書き抜いた父ミ子の對話の部分、親達の會話の部分が、この映畫のクライマックスに當るミころです。この映畫は、子供の口を藉りて、かうした子供の眼に映じた世の多くの父親達の生活を語り、之を批判しようとしてゐます。何も知らないが故に、それだけ何もをも純粹に考へる子供の口を通して、現代の小市民階級の生活の矛盾や、生活の悩みを云つたものを此處に描いてゐるのです。現代のやうに生きるに難い社會に直面しては、その日その日の糧を獲るにも、立身出世をするにも並々ならぬ苦勞が要ります。餘程の才、餘程の實力、又は餘程の無暴な押し力等を有たない、たゞに善良で氣の弱い人間でしかないものが、自己

の經濟生活、家庭生活を樂にしようとしてゐるなら、彼等は涙を飲み乍らでも甘んじて幫間的態度でもさらなければならぬのかも知れません。この社會の人々が全部が全部善良でない限り、殊に上に立つ權力者に無暴なものである場合には、自己の生活を護るためには、嫌でも何を何時の間にか傷つけ、踏みにじつて迄自己の立場を固守してゐる人がないとも限りません。現代は、遺憾乍ら金が多くものを云つてゐる時代であります。かうした時代にあつては、非常に多くの小市民階級が自己の本心ミ反對の方向に、無理にも歩んで行つて居ります。お金の有る無しで人の偉い馬鹿が決するものでは勿論ない、お金がなくても偉い人はある、ミこの父親は云つてゐるのですけれど、然しこの父親の生活はこの反對を目ざしてゐるのです。こゝにこの映畫は、父親の姿を藉りて來て現代の世相を現はし、子供の姿を藉りてこの世相を懷疑せしめ、批判せしめて我々の理想を暗示しようとしてゐます。つまり此處に現はれる父ミ子は、即ち現實ミ理想を象徴したものでありまして、此處にこの映畫の特質があつたのです。

最後の、父親の、「こいつも一生佗しく爪を噛んで暮すのか
さいふ昧的な場面、そして先程折檻した我が子の、涙ぐ
んだまゝスヤスヤ寝入つてゐる顔をデツミうち守つてゐ
る佗しい父親の姿、この父ミ子の二つの顔は、現代の一面
を捉へてゐるさいふ點で、そして我々に大きな暗示を與へ
てゐるさいふ點で、いつまでも忘れられない映畫であります。

この小津氏は、その後『出來心』とか『浮草物語』『箱入娘』
ミ云つた親子の對立した作品を製作してゐますが、何れも
『生れては見たけれど』ほどの強さミ迫力を持つものではあ
りません。たゞ『出來心』さいふ作品では、妻を失つた、そ
して小學校に通つてゐるいたづら盛りの息子を有つた、無
學で而も子煩惱な一人の父親が巧みに描かれてゐます。父
親は或る工場の職工で、無學でもあり、子供の細かな面倒
を見る暇ありませんので、子供の躰けなきは頓著なしの
方ですが、然し子供に對する盲目的な愛情には私達の胸に
沁むものがあります。この父親がフトしたこゝから年甲斐
もなく自分の救つてやつた娘に戀心を懷き、而もその甲斐

なきこゝを知つては、もう子供のこゝも忘れ仕事も投げ棄
てゝ家を外に放蕩して歩きます。それがある晩のこゝ酔つ
て歸つて、何かのいさかひから、己れの子供に手ひきく頬
を幾つもく打たれるのですが、何の抵抗をすることもな
く、たゞ子供の打擲に任せてゐる姿は、それからその子供
がワツミ泣き乍ら父親の懷にこび込んで來るのを堅く抱き
締めて父子が相擁して泣く場面は、もう理窟でも何でもあ
りません。たゞもう親子のなつかしさ、親子の尊さを見せ
られて、覺えず私達も泣かされたものであります。

以上に於いて、私はほんの二三の「父ミ子」を扱つた映畫
について述べて見ました。然し私のこゝに述べようとした
ものは決して映畫そのものではありませんでした。映畫を
映畫として述べるに當つては、自づミ又別の途がある筈で
す。たゞ、私がこゝに述べて見たいと思つたのは、父ミ子
の深い繋り以外にはありません。ゲーテは父親になつて
から、凡そみぎり兒をかき抱ける母親の姿ほゞ世に麗しき
ものは又ミないミ云つて居りますが、同じこのゲーテの口

から、「凡そ神々の創り給ひしものゝ中で父親の心臓ほざ傷つき易いものはない」といふ意味のフランスの諺を、その晩年涙を浮べ乍らリーメルといふ人に語つた云はれてゐます。

世に、母親の子を愛する心は、妻は、最早今日では公理以上の公理です。あまりにも之は大きな自然でありますから、却つて私は之を説く必要を認めません。然し、凡そ神の創り給ひしものゝ中で父親の心臓ほざ傷つき易いものはない、といふこの言葉は世の人々によつてもつこ味はれて好い言葉ではないかと思ひます。現代の私達のあまりにもめまぐるしい生活の中に於いて、最も靜謐を極め、最も深い繋りを有つものが、親子の間であるとするならば、この子にまことに愛されない父親は、何の目的を以て、何の樂しみを以て現代の生活苦に處するのでせう。子は母の愛のみにて育つものではなく、父は子の愛なくしては到底圓滿に生き得ないだらう、といふことを述べてこの事を擱きます。

(一〇三)

子どものお話

和子のお兄ちゃん、病院から今日かへつてくるの、

和子、ゆふべゆめみたの、

いつも、もと子ちゃんと遊ぶ原つばで遊んでたらお

兄ちゃん、自轉車にのつて

「カッコー、」つて和子のそばをスーッと

走つて行つたの、

和子嬉しかつた、だけどめがさめてお母さまにきい

たら、お兄ちゃん、まだかへつてゐなかつたわ、